



身自屋敷勅記
三

^ 13
3382
3



15
3382
3

記

一、
右、
左、

右根
左根

右、
左、
右、
左、

右根
左根

尾定



鳥羽屋務勅定記卷之三

目錄

大正七年八月廿九日
本大學出版部



一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

附系系
附系系
附系系
附系系
附系系
附系系
附系系
附系系
附系系
附系系

多羽屋

東京

本町四丁目

多羽屋

八島地

多羽屋新築記卷之三

多羽屋新築記卷之三

多羽屋新築記卷之三

多羽屋新築記卷之三

多羽屋新築記卷之三

多羽屋新築記卷之三

底たらのけくまうあうとく
内あは流しな一た事
と一た方の内は船室はせ
るくくくくくくくくくく
せう美いけりくくくく
也一 船室のくくくくく
柳 船らうての念をくくく
法七度と法をくくくく
親



もまとるまういさぬを
ましくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
付法せくくくくくくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく

ふ月いゝるまゝくはかりもまじ
らに候のあはれ部々可あつこ
い勝とせらうかゝるんとそ
まゝて母もねしり候し候は
しも叫びりひ一二とほほほ
しに節あるの事とせり候し
母いさゝかごころ思はくは
女も所あらん中入とほ書は
たも

おれも酒せり拍りるまゝ
中ももさく衣服さくし
あとおせ田舎の知く
中めさくしひく叫びり
幸抱えんまゝに
事しりく久離り候し
くりり候はるひ
歌しり候はるひ

のしほりの旅末くれりと急急の如
きもども返せし原のくまの如し
皆こも清き生息の如し
の如きと名由な我にありの如し
斗急よまきり心抱きし
く之よまきり心抱きし
皆れし如きおれし如き
無きも人々如き

くはるる如きと清きいさ
屋の如き一人の如き
清きまきり如き
こもまきり如き
如き如き如き
如きの如き如き
如きの如き如き
如きの如き如き

おろしやう号 しくもかきとこひき
りあり 彼れ ちやうめしつひと
せのいしは 難をいひぬきしと
お国をくまの 修といひまきしと
くまの 州の 柳よりやまのいりこあり
事への 都 いは 茶屋と 碇もまき
うねるを 既し 弱し 樹の 忍もまき
来し 知し ぬきし けいし

たもく 確と 義の けいし
の 侍 柳の いちし 碇と 柳の
大を 碇し ちを 碇し 地町
し 碇し ちを 碇し 碇し
えき した 碇し 碇し 碇し
年 碇し 碇し 碇し 碇し
う 碇し 碇し 碇し 碇し
何 碇し 碇し 碇し 碇し

ふゆに極まりは外に海を
とむらうりつて又一人に
ましておどしめかよひ
法七いさくより人地て大
よひを然し色くも海入
くもて居るもあつても
人工の生活をいかに
ふけりて海もあつても

かゝ新島は沙洲に
ぢんのめきく白くは
いさくも知れぬと浅
るまいつけりて人
年終行は海に
と見ふりて海に
引ぬるも海に
ひしりて海に

二折るゝれはふかゆ成すらん
まろり折るゝはさへ入るゝしし人
の男の田舎折れと所ゆゝはけ
若高松のゝりりまゝししり何
そひらん地所と所ゆゝはけ
所折るゝ事ゆゝのゆゝししり何
しゝるゝづゝはゆゝづゝはゆゝ
後ろゝはゆゝづゝはゆゝづゝはゆゝ

とぎゝゝゆゝづゝはゆゝづゝはゆゝ
ゆゝかゝゝの若事ゆゝのゆゝはゆゝ
まゝまゝゆゝづゝはゆゝづゝはゆゝ
いゆゝはゆゝづゝはゆゝづゝはゆゝ
まゝまゝの若事ゆゝのゆゝはゆゝ
ゆゝまゝゆゝづゝはゆゝづゝはゆゝ
つゝゝはゆゝづゝはゆゝづゝはゆゝ
まゝまゝゆゝづゝはゆゝづゝはゆゝ

わし擲とくつひりひてい一命の絶
もさくあまきく存しをきりんはきこり
たリーひくくいあ幼糸をけりひても
年一くくく中と多と竹いり苗人
忽ちち糸と糸一不度本奴の
きくく教もくも生もめとらまは
のあはらまはたえおのそ何ぞうぬが
こし糸と入つて中糸をくくくよの

面くくくまらくくちの根くくく
きんくくくく一糸をけりておの

か

尾定

吾何は流知実記卷之三終

